九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「奥の細道」覺書

小島, 吉雄

https://doi.org/10.15017/2332978

出版情報：文學研究. 37, pp.123-133, 1948-12-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

「奥の細道」覺書

小島吉雄

一

芭蕉の奥の細道を讀んでゐると、その記述が事實と相違してゐる個所に屢〻遭遇する。たとへば、「松岡の天龍寺」とあるべきところを、「丸岡天龍寺」と書いてあつたり、四月一日日光山麓一泊のはずが、奥の細道では三月三十日となつてゐたり、かういふことが枚擧にいとまがない程なのである。そこで、いま、この事實と記事との相違するものを仔細に調査してみるといふと、これを幾種かに種別する事が出來る。

まづ第一に、今ものべた「丸岡天龍寺」のやうな種類の間違ひであるが、飯坂溫泉を飯塚と記したり、「笠島の郡に入れば藤中將實方の塚はいづくの程ならんと人に問へばこれよりはるか右に見ゆる山ぎはの里を蓑輪笠島といひ」と書いたり、また山中溫泉の條に「その効有明に次ぐといふ」とあつたりするのは、みな同種類の間違ひと思はれ、これらは、いづれも、奥の細道の方の書きあやまりと見るべきものである。この書きあやまりは、芭蕉のしたものか、或は奥の細道を淸書した素龍の誤寫か、芭蕉の草稿の發見せられない現狀では、よく分らないが、とにかく、事實と記事との相違する部分には、この筆記者の書きあやまりと思はれるものが尠くない。尤も、いまあげた例のうち、飯塚とか、笠島の條とかについては、書きあやまりでないといふ說もある。飯野哲二氏の「奥の細道の基礎的研究」では、まづ、飯坂の附近に飯塚といふ地名があり、また古地圖にも飯坂のあたりを飯塚としるしてゐるから、昔はこの飯坂のあたりを飯塚と汎稱したものだと推定し、飯塚は書きあやまりでないといふ。また、同氏は、岩沼の西方に當る束街道から見ると、笠島は右手に見えるから、芭蕉はその地點にたつて「右に見ゆる」と言つてゐるので、「右に見ゆる」は間違ひでないといふ。しかし、古地圖の記載は、一般にいつて、

非常に大まかなのが普通であるから、それだけを信憑するわけにも行くまい。飯坂附近には飯坂といふ地名のあることは事實だけれど、これは飯坂からやゝ距つた距離にある小部落で、溫泉のある飯坂をも飯塚の名で汎稱するほどの大部落でない。芭蕉當時も溫泉の出るところは、普通には飯坂といつて飯塚と言はなかつたことは、曾良の隨行日記に「飯坂」とのみしるされてゐるのによつても察せられる。伊達正宗の飯塚溫泉入湯記は有力な資料だと思ふが、しかし、なほ、わたくしは奥の細道の飯塚は、やはり、宇形の類似から生ずる書きあやまりであらうと思ふ。笠島の條も、地圖を案じるに、芭蕉の辿つた道のどの地點に於ても笠島は左方に當つてゐる。のみならず、曾良の隨行日記には、岩沼と增田との間の左の方に笠島がある由だが、行き過ぎて見なかつたと記してをる。また芭蕉の眞蹟にも猿蓑集にも曾良の俳諧書留にも「左りの方」と書かれてゐる。これらによつて察するに、「右の方」は、恐らくは誤寫であらう。「笠島の郡」も、事實にあはぬ記事で、これも、芭蕉自筆をはじめ、前記の諸書には、いづれもみな「名取の郡」とあるから、多分書きあやまりと見るべきであらう。かういふ風に、書きあやまりでないといふ說は定說としがたいから、これらは、やはり、書きあやまりと見るべきものである。かういふ書きあやまりと見られるものは、奥の細道には相當數にのぼるのである。

次に、第二の種類は、芭蕉自身の記憶のあやまりと推定せられるものである。たとへば、「三月三十日日光山の麓に泊る」とあるが、曾良の隨行日記では、四月一日に日光山麓に泊つてゐる。元祿二年は三月は二十九日までしかなかつたのであるから、これは、明らかに芭蕉の書き間違ひである。芭蕉は、迂濶にも思ひ違ひをしたのである。また、曾良の隨行日記では、六月六日に月山に登山してゐるが、奥の細道では六月八日となつてゐる。三日に羽黑に着いて、四日に俳諧を興行し、五日羽黑權現に參詣したまでは、日記と細道と相一致してゐるにかゝはらず、月山登山の日時に至つて兩者に相違が生じてゐるのである。ところが、曾良の記錄は前後精細であつて、しかも記事に撞着することがないから、信憑すべきものと思はれ、したがつて芭蕉が八日としるしてゐるのは、恐らくは、芭蕉の記憶あやまりといふべきであらう。越後の市振を「越中の國市振」と書いたのなども、芭蕉の思ひ違ひである。

しかしながら、かういふ芭蕉の記憶のあやまりと見る

べきものは、案外にすくないのではないかと推察せられる。出發第一日の記事には「やうやく早加といふ宿に辿りつきにけり」とあつて、宛も早加に一宿したかの如き筆致になつてゐるが、曾良の日記では、この日は粕壁どまりとなつてゐて、早加は素通りしたのである。實際の里程から考へても、芭蕉はこの旅行中、日に平均九里餘を歩いてゐるから、粕壁どまりの方が妥當と考へられる。また、曾良の隨行日記によれば、芭蕉らは白石に一泊して、その翌日は仙臺に宿をとつてをり、岩沼はただ通過しただけとなつてゐるが、奥の細道の方では、岩沼泊りとある。これも一日の歩行里程から考へて、岩沼泊りは不自然だと考へられ、曾良の日記の記事の方が當を得てゐるやうに考へられる。ところで、これらの記事もまた芭蕉の記憶のあやまりと斷ずべきであらうか。穉つて思ふに、この旅行における芭蕉の年齢は四十六歳、この紀行文をしるした時は、最も降つて考へても元祿七年であるから、いくら早老の芭蕉でも、まだ數年前の記憶を全然喪失してしまふほどに耄碌してゐたとは考へられず、また旅行中のメモも簡單なものであつたかも知れぬが、存してゐたことゝ思はれるし、曾良の助言を求めることも出來たはずだから、全然の記憶ちがいといふことは比較的すくないのではないか。出發の最初の日にどこで泊つたかぐらゐのことは、われわれの經驗に徴して、芭蕉もはつきりした記憶を有してゐたことゝ思はれる。白石に泊つたか岩沼にとまつたかについても同樣であらう。曾良の日記にしるす事實によれば、白石で一泊して、その翌日正午頃に岩沼に到り武隈の松を見てをり、更に岩沼から增田へ行く途中で蓑輪笠島のことを耳にしてゐるのである。然るに、奥の細道では、白石を通過し、やがて蓑輪笠島を右に見て岩沼に一泊し、翌朝武隈の松を見てゐるのであつて、そのあたりの記事が全體にわたつて事實と相前後してゐるわけである。芭蕉の記憶間違ひからかういふ記事となつたのであるか、或は文飾のために故意にかゝる記述をしたのであるか、いづれとも斷定はしがたいのであるが、いまもいふとほり、執筆當時の芭蕉が事實を全く錯亂するほどに記憶を喪失してゐたとは信じがたく、或は武隈の松の記事に特別の筆意を示さむがために意識的にかういふ逆置的筆法を用ゐたかとも考へられる。曾良の隨行日記や名勝備忘錄によつても分るやうに、昔の人の旅行は十分な用意のもとに行はれ、克明な旅日記を書き留めるを常としたものゝやうである。わたくしの曾祖父は非常な旅ずきであつたが、旅に出るに

は、ひと月前くらゐから地圖を案じ文献を調査して、十分の用意をとゝのへたもので、旅中は克明に日記をしるし、時には稚拙な略畫を交へたものを殘してゐる。これは明治初年のことであるが、交通が便利になるにつれて、かういふ旅行者の心がけが漸次薄れてきてゐるけれども、交通不便な時代にあつて、旅行記の一つも書かうといふ芭蕉が、現代の不用意で氣まぐれな觀光客のやうな不用意さであらうはずがなく、十分な用意と手控へとを持つてゐたものと考へて差支へがないと思ふ。その證據には、奥の細道の記事には、事實と相違する部分よりも事實どほりの部分の方が、はるかに多いのであつて、それから見ても、芭蕉はうすれた記憶をもとにして、よい加減に筆を執つたとは輕々に斷じがたく、むしろ、周到な用意のもとに、筆を執つてゐると思ふべきである。從つて、この岩沼の記事ばかりでなく、總じて奥の細道の事實と相違する部分には、芭蕉の記憶あやまりもあるではあらうが、それは比較的に僅少であつて、むしろ、芭蕉が行文上意識的に事實を潤色し曲筆した部分の方が多いのであらうと推定すべきである。

二

さて、第三の種類は、今も述べた如き、芭蕉が、わざと筆を曲げて、事實どほり記述しなかつたと見るべき部分であるが、それらを更に檢討してみると、その文のかもし出す効果の上から、またこれを幾つかに類別して考へることが出來る。たとへば、讀者の印象を鮮明ならしめるために、數日にわたる記事を一日に壓縮してしるしたり、或は一日の事實を二日に引きのばして記したり、或は旅行の順序に從つて記事をすゝめずに地理的順序に從つてしるすといふ風に、記述上の便宜に從つたと見るべき一類がある。前日に日光山を見物し、翌朝裏見の瀧を見たのであるが、これを一日間の出來事として筆をすゝめてゐるし、那須の篠原見物と那須八幡詣とは別日であるにかゝはらず、これを一日のうちに經めぐつたことにしてゐる。これなどは、一日にまとめた方が力强い印象を與へ得るからである。これに反して、松島見物の條りは、奥の細道では十日に松島に着き、その日のうちに雄島を見、翌日瑞岩寺に詣で、十二日に松島出發となつてゐるが、曾良の日記では、九日に松島に着き、その日のうちに雄島をも瑞岩寺をも見物して松島に一泊、翌十日に松島を出發してゐる。松島見物は、このたびの芭蕉の旅行の第一目的であることは、奥の細道の冒頭文にも述

べられてをり、彼の手紙類によつても明らかである。從つて、奥の細道でも松島の記事に最も力をそゝいで、これに多くの筆を費してゐるのであるが、松島の美景を力説して効果あらしめるために、便宜上、松島の記事と瑞岩寺の記事とを二日にわたらせ、作者の感懐を印象づけるために此處に二泊させたのでもあらうか。かういふ風に記述効果をあげるために便宜上事實を曲げたものに、また象潟の條りがある。これは曾良の日記によれば、陸路干滿寺に行き、一旦宿に歸つたのち、さらにその夕方、舟を象潟に浮べたのであるが、奥の細道の方では、舟を象潟に浮べて、水路干滿寺を尋ねたことになつてゐる。また、仙臺から鹽釜への途中、壺の碑を見、ついで野田の玉川、沖の石、末の松山等を經て鹽釜へ到着したやうに書いてあるが、事實は、壺の碑から鹽釜へ直行し、野田の玉川などは鹽釜着後經廻したのである。文章を簡潔に、しかも感銘あらしめるために、事實上の旅程に從はず、地理的な道順に筆をすゝめたものと思はれる。那谷の觀音に行つたのも、曾良の日記によれば、山中滯在中のことであるが、これも道順に從つて、那谷を經て山中へ行つたことにしてしまつてゐる。やはり、簡潔にして感銘深い文勢をねらつて、事實を犠牲にしたのである。かういふ風に、奥の細道の記事には、文勢のために事實上の旅程を變改してしるしたものが、あるのである。

次に、また、かういふ記事がある。たとへば、淺香の沼のくだりに、

「沼を尋ね人に問ひ、かつみかつみと尋ねありきて、日は山のはにかゝりぬ。」

といふ文章があるが、これが、また事實ではないのである。といふのは、前夜とまつた郡山を日の出前に出立した芭蕉は、まだ朝のうちに淺香沼を見てゐるからである。郡山から淺香沼のある日和田までは一里半しかない。そして、芭蕉は、それから二本松に出で、黒塚を見物し、福島に宿をとつてゐるのであつて、淺香沼で日のかたぶくまでまごついてゐては、黒塚を見て福島までその日のうちに辿りつくことは困難であつたらう。「日は山のはにかゝりぬ」は、事實を誇張した芭蕉の文飾である。然らば、どういふ意圖で、芭蕉はかゝる文飾をあへてしたのであらうか。「かつみ」は實方の故事もあり、古歌にも詠まれてゐる草花で、それを床しがるといふことは、とりも直さず風流雅懐のほどを表明することになるのである。すなはち、芭蕉としては、おのが旅の風流を強調するために、長時間「かつみ」を尋ね廻ることにし

たのである。なほ、また、平泉の條で、「二堂開帳す」とあるが、曾良の日記によれば、別當が留守だつたので、經堂は開帳しなかつたのである。然るに、この文では經堂をも開帳したことになつてゐる。芭蕉はなぜにまたこのやうな嘘を書いたか。これも、やはり事實を誇張して文に趣あらしめむためであるが、では、文にどういふ趣をあらしめてゐるかといふと、懐古の感傷を強化するに役立つてゐるのである。

市振の條には、「この間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて、事をしるさず」とある。第一に「九日」とあるのが、事實と違つている。「越後の地に歩行をあらためて越中の國市振の關に至る」とあるから、越後に入つてから市振までの日數をかぞへてみると、曾良の日記によれば、十四日である。それを芭蕉は九日としるしてゐる。これは勘定があはない。しかし、越後の新潟を出發してから市振までが丁度十日間であるから、芭蕉は或は新潟から市振までの日數を概算的に九日としるしたのかも知れない。市振はまだ越後に屬してゐるにかゝはらず、芭蕉はあやまつて越中の國と書いてゐる。これは單なる思ひあやまりであるが、これから類推すると、九日といふ日數も強ひて誤りとして咎めだてする要はあるまい。「暑濕の勞になやまされ」とあるのは事實である。この旅中は雨多く、蒸暑かつたので、かなり弱らされたらしい。けれども、「病おこりて事をしるさず」は誇張である。疲勞したことは事實であつたらうが、それが病とまでには至つてゐない。曾良の日記では、むしろ病を發したのは、曾良の方であつた。然るに、芭蕉をして「病おこりて事をしるさず」と述べ、越後路の記事を省略せしめたものは、何か。おもふに、この越後路は、歌枕に乏しかつた。それから、この越後路では、風流事がなく、どちらかと言ふと芭蕉にとつて不快な事が多かつた。柏崎で冷遇せられて鉢崎で泊つたり、直江津では聽信寺で宿をことわられたり、曾良の日記を見ると、あまり快適な旅ではなかつたやうである。すなはち、かういふ芭蕉の心をひく歌枕もなく、不快がちな旅であつたから、この間の記事を省略してしまつたのだと考へても差支へなささうである。芭蕉の旅の記は風流韻事のためには事實をまげても筆に力を入れるかはり、このやうに風流事に乏しい場合には記事を省略してしまふといふこともあるのである。しかも、「病おこりて」といふと、旅の心細さ、わびしさが言外に汪溢することになるから、そこがまた芭蕉のねらひでもあつたのであらうと思ふ。

松島から石の卷への道中の記事に、「平泉と心ざし、あねばの松、緒だえの橋など聞き傳へて人跡まれに雉兎蒙蕘の行きかふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて石の卷といふ湊に出づ」といふのがある。これは、人々によつてよく引用せられるところで、有名な一節であるが、曾良の日記によると、芭蕉らは松島から石の卷街道を歩んで石の卷に出たのであつて、「人跡まれに雉兎蒙蕘の行きかふ道そこともわかず」といふやうな間道ではなく、人馬車も行きかひ宿驛も完備した天下の大道なのであつて、普通ならば道ふみたがへるはずもない。そこで、說者はいふ、石の卷街道は若計といふところで野蒜街道と道分になつてゐて、その野蒜街道を辿れば奥州本街道に出られるのであるが、その街道は道分のところで一寸あと戻りするやうな形になつてゐるので、道に不案内なものは石の卷街道の方を野蒜街道だと誤認するおそれがある、芭蕉も多分さういふ誤りをおかしたのであらうといふのである。しかし、もし、さういふ風に道をふみちがへたものならば、曾良の日記にその片鱗でもしるされてゐさうなものであるのに、少しもその事がない。昔の人は常に道中記を懐中し、前以て道順を研究したものであるから、さう易々と道にふみ迷ふはずがない。分りにくい道筋で、しかも宿驛に乏しく、人跡もまれで、道を問ふことも出來ないといふやうな特殊の場合ならばともかく、この石の卷街道のやうな宿驛も完備してゐる大道にあつては、道に迷ふなどといふことは、いよいよ以てあり得べからざることのやうに思はれる。曾良の名勝備忘錄には、石の卷及びその附近の名勝をしるしてをるし、かつ石の卷から一の關まで一路一の關街道が北上してゐるのであるから、或は芭蕉らに最初から石の卷へ出てその附近の名勝を探り、更にこの一の關街道を北上しようといふ意圖があつたかも知れず、もし、さうとすれば、芭蕉のいふ「道ふみたがへ」は事實と違つてゐるといふことになる。但し、曾良の名勝備忘錄には貼紙して、「松島三リ半大松澤三リ半三本木、古川緒絕橋有……一ノ關、山ノ目」との地名をしるしてをる。この貼紙は、あとからの書き込みであるが、これが松島での書き込みとすれば、或は石の卷へ出ないで本街道を平泉の方へ辿る氣特があつたのであらうかとも推定せられるが、この貼紙は、松島よりも以後に書き込まれたものかも知れないから、これだけでは芭蕉らの意圖を推測することが出來ない。それから、石の卷に着いて、「宿からんとすれども更に宿かす人なし」と芭蕉は書いてゐるが、曾良の日

記によれば、「小野と石の卷との中間にある矢本新田といふところで、のどが乾いて家ごとに湯を乞ふけれども、くれない。折から刀さした五十七八の人が通りかゝつて、これに同情し、わざわざあと戻りして知人の家に伴ひ、湯を與ふべき由を賴んでくれたばかりでなく、石の卷へ行けば新田町の四兵衞といふ家を訪ねて宿を借りるやうにと敎へてくれた。それで、石の卷ではその四兵衞方に宿つた」と書かれてゐる。これを信ずると、芭蕉の記事は虛構である。かういふ虛構を芭蕉があへてした所以は、その文章の與へる効果から考へて、旅の心細さ、旅の物あはれさを强調せむがためであつたと思はれる。さきに述べた「病おこりて」といふ記事の意圖する効果と相同じいのである。出羽越のところで、風雨のため山中に三日とぢこめられたと書いてゐるが、これも事實は二日にすぎなかつたのを、三日と書いて、わびしさを强化しようとしてゐる。

これを要するに、奥の細道に見える芭蕉の虛構の記事には、第一類として、文勢上實際の旅程と順序をかへたものと、第二類として、旅の風流を强調したり懷古の情を强めたり旅の感傷を强調したりするために事實を誇張潤色するものとがあるのである。而して、このことは、事實のとほりをしるしてゐる記事の傾向と同調してゐるのである。

三

曾良の日記と奥の細道とを對照してみて、兩者の記事の相一致するものを拾ひ出してみると、たとへば、日光での佛五左衞門の話や、殺生石行きの途中での馬の口付の男の話、仙臺での加右衞門の話、松島の雄島に住む隱者のこと、或は玉生一泊、出羽越の一條等をあげることが出來るのであるが、五左衞門や馬の口付男や加右衞門や雄島の隱者は、いづれも風流雅懷をたゝへ、その隱逸的性格に心ひかれた記事であり、玉生泊りや出羽越やは、旅の物あはれさ、わびしさを描いた文章である。殊に出羽越の條は、「三日風雨荒れてよしなき山中に逗留す」といひ、「けふこそ必ず危きめにも逢ふべき日なれと辛き思ひをなして後について行く」といひ、「高山森々として一鳥聲きかず木の下闇茂りあひて夜行くがごとし、一雲端に土ふる心地して篠の中ふみ分けふみ分け水をわたり岩につまづきて肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ」など、例の芭蕉の誇張的な筆致かとも疑はれるのであるが、曾良の隨行日記によると、五月十五日に羽陸國

境の境田といふところに泊り、風雨のため滯留し、十七日に境田を出發して一路尾花澤へ向つてをり、現今は陸羽東線の通じてゐる正路を行かずに、笹森から南下して山路を辿り、明神、刎、市野々を經て正嚴に出で、尾花澤に着いたのであつて、丁度三角形の底邊を歩いて近道をしたわけである。飯野哲二氏の「奥の細道の基礎的研究」にくはしい說明が出ているが、この刎から市野々へ出るあたりが大變な難路なので、芭蕉の文章は決して嘘いつはりでも誇張でもなく、事實全くそのとほりらしいのである。芭蕉は、かういふ旅の感傷をそゝる事實には筆を惜しまなかつたのである。象潟の雨景もまた事實と一致するのであるが、「あまの苫屋に膝を容れて雨の晴るゝを待つ」たのも、また事實であつた。かういふ旅のわびしさは、芭蕉は、のがさず筆にしてをるのである。ところが、同じ旅のわびしさではあつても、あまりに不風流殺風景な場面は、省筆して記錄しない。たとへば、能生を出て糸魚川へ行く途中、早川で芭蕉がつまづいて川中に轉落し、全身ずぶ濡れとなり、川原で衣類をぬいで乾かしたといふことが、曾良の日記に出てゐるけれども、芭蕉はこれを筆にしてゐない。その事實があまりに殺風景すぎて一點の風流氣をも伴はないからである。芭蕉の描く旅のあはれさ、わびしさには、一縷の詩味が隨伴してゐるのである。蓋し、あまりにも現實的すぎたどぎつい事實は、彼の風流の對象たり得なかつたものゝやうである。

さて、さきに述べた芭蕉の虛構の筆と、この事實を描いたところとを比較してみるに、その兩者に共通するものゝあるを、われわれは見出だすであらう。すなはち、旅の風雅と旅のわびしさとを强調し、旅への詩的感傷を燃やしつづけてゐるといふ點に於て、兩者共通してゐるのである。

四

以上は、事實との關連に於て奥の細道の記事を眺めたのであるが、これによつても分るやうに、奥の細道に於ける芭蕉の筆致は決して事實に忠實なものではない。時には平氣で嘘をもいふのである。しかし、事實に忠實でないからと言つて、奥の細道の文章をつまらないとは言へない。芭蕉の文章に對する考へは、今日のわれわれとは違つてゐる。現代のわれわれの文章觀から言へば、物の眞實を寫すところにまづ作文の主眼がおかれねばならないのであるが、芭蕉がこの紀行文で意圖するところ

は、物の眞實を寫すといふことにはなかつたやうである。それよりも、主觀の表出、氣分の構成に重きをおいてゐて、文勢語勢のためには事實をも犧牲に供して悔いないのである。明治の中期頃に所謂美文といふものが行はれたことがあつた。その頃は美文文範などといふものがあつて、文章家といはれるものは、さういふものに收められてゐるやうな古今の美辭麗句を縱横に應用して讀者を魅了するにつとめたものである。その頃は、事實の眞をさほど重んじなかつたのである。それよりも文飾の美を尊んだのである。甚しきに至つては、詞藻に凝つて情念の空疎を顧みない美文家すらあつたのである。奥の細道は詞藻のための詞藻、文飾のための文飾といふやうな弊害には、もちろん陷つてゐないが、その構文法は、このやうな古今の名句美辭をかりて文をあやなす構文法内至表現法に相通じてゐるのである。たとへば、深山を形容しては、「一鳥聲きかず」といひ、「雲端に土ふるふ」などといふ成句を用ゐ、松島・象潟を描くに、まだ見ぬ洞庭西湖を引き合ひに出し、「その氣色曾然として美人の顏を粧ふ」などといふのである。奥の細道は著しく美文的だと言はねばならない。ところが、かういふ構文法内至表現法は、およそ漢文學的なのであつて、その方の影響から發してゐるものなのである。元來、中國の文章觀には、文飾を重んずる一面があつて、それが我が國にも傳來して、更に彼の國の作文法を模する傾向すら生じてをる。芭蕉は、また俳諧によつて會得したものを、その文章にも應用して、文章の一體を創始しようと考へてゐたものゝやうである。俳諧は趣向を第一としてゐる。趣向とは、詩的世界を客觀的に構成することであり、詩趣を具象的に構成することである。すなはち、俳諧は、もちろん、自己の體驗を基礎にはしてゐるけれども、なほかつ想像を働かせて作り上げた詩的世界である。奥の細道にも、やはり趣向が重んぜられてをり、自己體驗が絶えず觀念的主觀によつてモデイフアイせられてゐる。奥の細道の構成は甚しく俳諧的なのである。そして、そのことが、さきほどから申し述べて來た、必ずしも事實をありのまゝに寫さず、文飾を重く見てゐるといふ奥の細道の表現の仕方を一層推進させることになつてゐるのである。

一體、奥の細道の主想は、冒頭文の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」にあるのであつて、卷末の「蛤のふたみに別れゆく秋ぞ」の句は、この

冒頭文に照應して結びの役目をつとめてゐるのである。すなはち、この主想を力強く展開させて、人生の旅路におけるほそぼそとした無常流離の寂寥感を表出してゐるのが、奥の細道一篇であつて、芭蕉は、この一篇に於て、宇宙人生を無常流轉の相に於て認識する世界觀を以て、自然をながめ、人事をとりあげてゐるので、およそ、この紀行文は主觀的色彩の強いものと言はなければならない。かういふ主觀にもとづく作品の人を動かす力の有無は、かゝつて、その主觀の深淺大小にある。いひかへれば、その作品の内藏する人格とか精神とかが、その作品の價値を決定するのである。芭蕉にとつては、事實を寫す寫さぬは、けだし問題ではなかつたのである。奥の細道が美文的だとか俳諧的だとかいふのも、つまりその表出法上の問題であつて、所詮、奥の細道の眞價は、その作品から感得せられる精神力の深淺にかゝつてゐる。

なほ、最後に一言つけ加へておきたいことは、芭蕉の旅は決して一人ではないといふことである。常に同行者がある。奥の細道の場合でも、曾良との二人旅であり、曾良と別れてからも、或は北枝が、或は等栽が、或は路通が相伴うてゐるのであつて、芭蕉が一人で歩いてゐる場合が全くないのであつて、これは大いに注意すべきことだと思ふ。これは、芭蕉の人柄とか人間性とか、或は旅行觀とかを知る上に極めて大切なことであつて、芭蕉の旅は、禪僧の捨身行脚の修行とは、いさゝか性質を異にしてゐるのである。このことは彼の文學の性格を明らめる上にも大切なことだと思ふから、一言書き加へておく。

以上は、奥の細道を讀んで、思ひ浮んだ事どもの一端を語つたのである。筆が終りに近づくに從つて、擱筆を急ぐのあまり、いさゝか腰くだけのていで、論旨を十分述べつくし得ぬ憾みが殘つてゐる。これは、偏へに、原稿締切日なるものをこのたび新しく設定して、成稿を急がせた編輯委員の責任であつて、更に申しのぶべき點や考究すべきことがら、たとへば、芭蕉の生涯の作品の系列に於て奥の細道はどういふ地位を占めるか、或はまた奥の細道中の俳句の特色を調査することによる芭蕉の自然隨順といふことの再吟味等については、他日を期するの止むを得ざるに立ち至つたことを、わたくしはいよいよ以て殘念に思ふのである。